

教育観察・参加十年の実験報告

——Hospitationのすすめ——

富田 竹三郎

一、その初め

初等教育科でする夏の研修会は合宿のそれにしたい、とは初めから皆の考えであつた。

夏休み直前であるし、大学に入って間もないのであるから、大学生活(研究・教育)についてのオリエンテーションにすべきだという考の出でくるのももつともである。が一般の大学で行なわれてゐる入学当初のオリエンテーションはすでにおえてゐる。それをくり返す要はあまるまい。

団体生活、集団生活の実践とその指導とを合宿研修の内容にするとする考もある。その研修や訓練は、大学生だけでなく、われわれの社会生活にとつてもきわめて重要なことである。ただそれだけを主要目的にして研修会をする、練習する、ということになると、研修会が面

白くないものになるおそれが出てくる。その会が「道德」の実践研修会になるのではないかと心配される。だがそう言つても共同生活の訓練の重要なことには変りはない。何かの形でわれわれはそのようなしつけをせねばならないし、また自らもうけなければならぬ。そこでわたくしは生活規範の練習、訓練は、一つの目的をもつた生活(研究・調査・そのための作業の)を共同でするとき、自然に、事実(人間生活の厳粛な)に迫られて、練習する、訓練をうける、というようにしたい、と考えてゐる。共同の研究・調査作業に価値を見出しそれに没頭すればする程、その成立条件である共同生活の訓練がよく行なわれるのではないか、と思うのである。

学生相互、教師と学生とのあいだの親睦・融和・理解のため、話し合う機会をつくるのが、この研修会であるとの考え方もある。入学前は全く未知の間柄であつた学友と、新たに生活をともにするのであるから、よい学生

生活のために理解が必要であることには論のないことであろう。ただその話し合いを成功させるにはどうするか。集って、友情、恋愛、学生生活、学問というようなことを話題にすれば、それでそのことが成功するであろうか。私はそこに不安なきを得ない。

大学でそのような問題が合宿研修での班別討議の話題になり、討議題目になっているようである。それは自然であろう。ただそれを話題とするからには教師や学生はそれについての準備が必要であろう。(つまり討議は研究とならねばならぬ)それがあつて初めて討議は成功するであろうと思う。その場での思いつきや、あさい経験を材料に話し合うのであつたなら、はるばる出掛けたの合宿研修に値する内容に発展するであろうか。そこに多少不安がある。五、六名一室での話し合いならまだしも、十名以上の集りの中で上の題目となると、内密な経験はとくに出しにくく、とくに女子学生の場合話し合いは発展するであろうか、深まるであろうか。経験のない私には不安である。

だが学生相互、教師と学生とのあいだの親和・相互理解の必要なことはきわめて明らかであり、極めて大切である。

われわれは坐して語り合うよりも、共に働き共に行動するとき、より多くより深く人と理解し合う。こういう事実を考えあわせると、合宿研修でも共同の仕事(作業)、研究、調査が相互の理解のためにも必要なのではないかと思うのである。仕事や研究を媒介にしてこそわれわれは、自然と人生・社会に入っていくことができる。それなしに入ることが不可能ではないにしても入り方は浅いのではないであろうか。

初等教育科の合宿研修の目的は端的に言うなら、形式的には研究調査、その内容は教育の実際、具体的に言うなら、学校訪問、教育の観察、調査とした方がよいのではないかと思うのである。

学生が希望して入ったところは、小学校・幼児の教育・保育に関する。そういうことからその仕事がどのようなものであるかは、入学したものが第一に知りたいところであろう。そして自分の未来を具体的に想像して、それに対処するため準備したいと思うのは当然である。

未来の仕事は自分の全力を投入するに本来値するものであろうか。またその現実の状態が自分の予期したようなものであるか否か。それにも増して自らの性格、能力、

興味がその仕事に合っているか。子供が、子供の世話がすぎだからと言ってきた自分を、教育の實際に対照して見ようとするのはまことに自然であろう。

教師としても、大学としても、教育の仕事がどのような価値をもつものであるかをよく学生に知らせたい。たとえ困難な、苦しいことのある仕事ではあるにしても、やはり甲斐のある、意義のある、たのしい仕事でもあることを直接見せる必要があると思うのである。一生をこの仕事に打ちこんで悔いすることない価値のあることを、直接に見せ、直接に体験させることがもしもできたとしたら、それは学生にもわれわれにも大変有難いことである。

一生の仕事というようなことは今言えないことは明らかであるが、毎日している学問や研究が自分の将来を築くためどのような意味をもつか。これも教育の実際を見ることが理解し易くなるのではないか。日々おきニユースになる教育現象も自分のこととして見えるようになるのではないか。

生涯を打ちこむというようなその価値を四・五日の合宿で見出すことの不可能なことは明らかである。生涯をかける価値を見出すには幾年月にもわたる自己研究を要するのである。然しそれに至る糸口は、磨かれた魂を

集中するものに決して拒まれていくわけではない。それは四・五日の合宿でもえられる(二年間の研究、学習は勿論それを目ざす)と思うのである。そのことから合宿研修は教師を目ざす若い人とその後につづく生活のオリエンテーションであるとも言われるであろう。

わたくしは夏の合宿研修を人生のオリエンテーションともしたいと思うのである。

この合宿研修は学生自ら研究・調査するのが本来で、その準備、細部の計画、進行も学生自らすべきものであろう。ただ一年だけの場合はそれができない。経験のある二、三年のリーダーがいなければならぬ。

一、上のような合宿の第一の仕事は、学校訪問・参観・調査・研究である。それについての教師・校長の講話・説明は学校の仕事を見て理解するため欠かせないことである。それらを手掛にして、小学校の教育、自分の志望・理想、大学の教育の意味等を考え、学友と話し合い、共同して研究し合うこと、これが第一の仕事に属する。

二、第一に付随し、あるいは並行して学生の表現活動がある。レクリエーションがかえって中心となる仕事をすすめる。そのように歌、写生などが個人だけでなく共同の生活と仕事を豊かにし、親しみをふかめ、たのしい

ものにする。それは欠かせない。しかしそれは上の趣旨による場合、どこまでも第二のこととすべきであろう。

三、第一第二を動かしていく共同生活の規制が必要である。青年の家、宿舎にはそれがある。われわれは仕事のため喜んでそれに服従し、自分を団体の生活に訓練するわけである。

四、前年の唐沢山の合宿は、栃木市第一、第二小学校での教育観察と県営プールでの水泳練習につづく一連の夏期研修の一つであった。前の二つは無事、成果多。合宿は聴講その他の時間が多くなりすぎ共同研究と自由の時間を十分とれなくなつた。今後改めるべきところであろう。

(昭和四三稿)

二、学校の参観と参加の願い

(一)

昭和四十三年に初等教育科をつくつたその年から、一年生に次のことをすすめてきました。夏休のあいだの又は九月の初めの一週間に、郷里の小学校又は幼稚園に上つて、そこを参観させて頂くこと、そしてできること

なら、どんな仕事でも結構ですから、先生方のお手伝い(参加)をさせて頂くようお願いせよ、と。

このことは、参観と先生のお手伝いで、教育の仕事がどんなに大切で、困難ではあるがまた楽しいものであるか、それを感得させたい、というのが私たちの願いなのです。

教育科の学生といつても四月に入つて間もない一年生です。それでも子どもだけの彼女らですから、できるだけ早くから教育が実際に行われるその所を見せて頂くよう、また出来ますなら助手のように使つて頂きたいのです。その中で授業・訓育(生活の指導)・管理その他の仕事の準備・整理の一部分で、貴重な経験の何かをえさせたいのです。

(二) 小学校における参加(付参観)の方法

○先生方にならつて登校下校させて頂き、参観・参加すること。

○先生方の授業とご指導と参加の内容を記録し、翌日提出してお目にかけること。

○次の一、二のそれぞれのばあい、先生方の行う子どもの管理・指導にその機会がございましたら、ご指導の下に、手伝わせて下さるようお願いすること。

一、始業前 子どもの登校・教室の整備・朝の当番のしごとなどについて。

・朝会時

・授業時 学生は主として参観し、「記録し^註つつ見習う」こと。

註、ここは研究授業の他はひかえる。

・休憩時

・給食時

・清掃時

・放課後 子どもの当番・係(花・飼育……などの)。

先生方の成績物の処理・宿題等について

二、子どもの遊びと作業のとき

・子どもの自習時間の管理(事前に先生方の指示・注意をうけて)

・先生方の行う教室の整備・準備その他の校務について

(四三年稿五一年改稿)

三、参観・参加の報告を見て

(一)

毎年、栃木市、烏山、益子の小学校幼稚園でお世話頂いている。若い人たちに教師としての心情や態度をつくり技能を得させようとしても、大学の中だけではそれは不可能であろうからである。小幼の教師の場合、とくにそうであろう。いわゆる教育の現場がないからである。

教育関係の学部で入学の初めオリエンションをする。わたしたちも行っている。わたしたちが一年の夏休みの前後に行う参観・参加は、それを学生の生活に入れてしているわけである。皆んな言っているように、これまで教育を受ける生活だったのを、教育をする立場で社会を、人を、子どもを、自然を見て考えるように立場を変えさせる。それをするとき大きな役をするのは小学校、幼稚園という現場である。

そこで四日の参観、郷里の一週間で参加に加えた参加をしてきた学生の報告を見ると(一)改めて子どもを見直している。(二)安易に考えていた教職が大変な仕事である、(三)慕ってくれる子どもから初めて先生と呼ばれたことに感動した、とある。凡ての人が一様にかのことは書いてあるわけではないが、とくに書かなくとも強弱の差はあれ、共通した経験ではなかつたかと思う。(一)では学校の子どもと園児の動き一つ一つを、新鮮な心でとらえ驚嘆

して書いている。(二)では子どもが好きで初等教育に入つたが、教職の実際は多忙である上に教授の内容が高くまた多く、自分らの子どもの頃よりずっと進んだ内容を教えている。自分はこれを教える教師になれるであろうか、との心配が大きく出ている。それでも(三)「純な子どもが自分を慕って、先生先生と呼んでくれる。何としても努力し、この子たちを教えるだけの力を得たい。このこと以外に仕事はない、と決意した」などと報告したものである。

(二)

栃木・烏山・益子の四日、郷里での一週間は、気楽な、たのしいだけの日ではなかったようである。それなのに子どもにあのようにつよい興味を、愛情を、魅力を感じている、若い心を躍動させている、学校・園のことは特別の仕事であつて責任は重い。若い人が教職に不安になるのは当然のことであろう。その彼女らを引きつけたのは何であろうか。それは若さをそれに打ちこんで悔いすることない教育そのものもつ価値だつたのではないか。子どもの純な心と、それを助け育てる仕事のたのしき、よき、重き、それに関する興味、魅力、つまり教育がもつ価値だつたのではないか。「学校は知識・技術だけでは

なく、健全な心を得させるところであると、子どもが毎朝楽しそうに登校するのを見て、そう思った」とその中の一人は言っている。また「うれしかったのは子どもら『先生先生』となつてくれたことであつた。教職に私はまよつていたが、この参観で絶対に先生になろう、と野心にもえている」と他の一人は書いている。

初等教育科に入つて三、四カ月にすぎない。そのあいだに子どもについて教育・保育内容について、教師、学校・園について何ほどか経験した。その上この仕事のもつ価値について、浅くとも一つの体験・経験をもつことができた。これなしでは、教育の世界に入ることにはできない貴重な体験を得たのである。

私も旧制の師範学校で教育をうけたし、またあとにはそこで教師の養成の大部分は、教育の理論の面についてのものであつた。他の面である価値について教えるときも、それを理論化して理解させようと努めていたように反省される。価値の面については、最終の学年の終りに実習で体験できる、という考えに立つていたのであつた。教育のもつ価値を身をもつて体験するとき、それに興味をもち実際に自らも行って見たいということになる。また真剣に研究もしたい、ということになる。即

ち欲求がおき、興味を感じ、目的をもつことになる。初等教育で行っている参観・参加は、教育へのいわば基礎づくり、動機づけするもの、教職研究のための第一歩である。(知識でなく経験・体験の重視であるとすでに四十八年度に書いた)

(四十九年度稿)

四

昭和五十一年度の学校参観では、私は栃木第四小学校と七井の小学校を参観させていただいた。二つの学校とも今度が初めてだったこともあって、大へん多くのことを教わり感謝している。第四小では校内マラソンと各学年分担任する校内の整備作業を見せて頂いた。この二つはもつと以前から、この学校でまた栃木市内でも実施しておったのかともあとで思った。(それをその場でお尋ねするところを、そのままにして帰った。学生の方でもし質問しておつたらききたいのだった。あとの研究会の話題にすべきこと、そのための研究である)

校内マラソンは一年生から六年生まで校庭を走るの

ある。非常によい、どの学年の子どもにもできる。無理にならない、子どもの力に応じた運動というので、私など大賛成である。校内の整備作業はこれまでPTAの方が奉仕で行っていたのを、学校の考えで子どもが引き受けることにした、という。子どもにできることは、自分の学校なのだから、子どもがするのがほんとうだ、という考えからである。これも良いと思った。(これもあとの研究会の話題に出さなかった。その時間もなかったのだ。参観は授業を見ることと思ひこんでいるのは、教師の方で指導すべきであった。作業の意義については学生に考えさせるべきであらう。)

参観したあとの話合いに気がとられて、そのあとに大切なことを見落してしまった。子どものする教室の清掃作業である。普通の仕方では同じ学級の子どもが組に分れて行うが、それを上級、下級の子ども一組になってする方法を第四小ではとっていたらしい。これを見落した。惜しいことをした、と思っている。このことも益子の研究会でも話題にしなかった。

七井小学校は本年初めて参観させて頂くところ、つい一年前に新築されたところである。新しい校舎でいかにも純朴な健康そうな子どもが廊下にまでころげ出てく

る。また学習しているその態度に心引かれた。

先生の講話は参観者に対する案内、指導解説の意味をも入れて下さっているので、感謝しているのである。われわれにとつて有益できわめて教育的である。そこで行っている教育について、その場で聞く講話であるから、大学できく講話なにも比較にならない力をもっている。

本年は、栃木の松本校長が現在いろいろと話題にされている主任問題婦人教師の増加を考えに入れた学校経営について講話された。また増田茂子教諭はご自身の体験にもとづいて、教師の誇りと喜びについて語られた。われわれに深い感動を与えた。

七井小学校で石田教頭、大坪教務主任の講話に感銘をうけた。教師は自分の人生観、教育観を立てよ、実践を通して自分を見つめ自分をつくりながら主体性を確立せよ、と言われるのです。

この参観のあと、青年の家で菊池教育長の講話を拝聴した。菊池先生には益子に行き初めたとき（その益子小学校長）からお世話になつてゐる。そのときもここで講話をうけ、今も心にのこる。この度の参観についてはとくに積極的なご援助ご助言をうけた。この度の講話では現在の教育の欠陥を指摘され、教育を学校教育オンリー

に考えている世の人々の誤りをつよく指摘する。とともに、子どもを過保護にしていると、ことば鋭く言われる。そしてこの欠陥に立ち向う方策として、教育内容を精選、圧縮して、学校の自由裁量の時間を設けよ、という。そしてそこで郷土の自然に接し郷土の歴史の中で、広い意味で教育することにせよ、と益子の地域に例をとり熱情をこめて話された。菊池先生は旧制師範を出ていらい芳賀郡を中心にした長い、教師、校長、教育長の活動の中でつくり上げたもの、それを背景に話されたのであろう。われわれはよい講話をうけた。その内容は、栃木市内での校内マラソン、校内作業とともにそれは、そのころ教育審議会で論議されているさ中の、最大の問題点の一つへの解答でもあつたのだ。

菊池先生の講話は夏の初めであつたが、秋の十月には審議会はそのまとめ（中間報告）を出したし、十二月の末にはその答申を出した。それによると、年間授業時数は現在の程度が適当であるとしながら「体力増進のための活動、教育相談に関する活動、集団行動の訓練的な活動など、学校が創意を生かすことのできる時間を確保できるように検討した」と「まとめ」であり（十二）、さらに十二月には「地域の自然や文化に親しむ体験的活動」

を入れて答申をつくっている。

今にして思えば菊池先生の主張されていることは、最終の答申に大きく反映していた。おそらく全国の教育長、小学校長の改革意見をも背後に、確信としてわれわれに語られたものであろう。

われわれの学校参観はこのような参観である。長き時の中でつくり上げた教育の実体を、学校のいまの教師の活動を、目の前に見る。とともに未来の新しい教育の動きや萌（きざ）しをそこに見るのだ。

過去をうけ、そして「いま」そこから生まれいくその未来を展望する、これがわれわれ教師の学校参観である。

参観のあと研究会の仕方がある。これについて今までいろいろ考えていた。その考えにもとづき昨年から学生一人一人に記録させた。四〇〇字一枚位（それをこえてもよい）、学校で見たこと、感動したこと、めづらしいと思ったことを記録させておく。それを研究会で一人一人に報告させる。読んでもよいし、それから離れて話せばなおよい。それについて質問する。意見をのべ、話し合いになる。二十人、五十人の意見をまとめて結論を出すのではない。つまり学級会の話合い方式はとらない。学

校とその教育についての個人の体験を報告する。それを深めるのである。他の人はきいていて啓発されるのである。個人の体験が大切である。そのときその人に教育価値の体験と感動がおこっている。ひそやかにその人はつくられている。そこに目的がある。

戦後カーレ女史の指導で始められた観察方式から、日本の教師は多くのものを教えられたが、今ではもう別れなければならぬ。二、三年前から学生の子どもの観察の報告を見ていて、この考えと方式にとりついている。

鳥山小の観察

一年一組

青木 静子

教師になるという目標を、ただ遠い漠然としたものとして入学したわたしたちにとって、自分の進もうとしている道に対し具体的に一歩進ませてもらったのがこの研修ではなかったらうか。

また教える者の立場に立つて子どもを見つめ、教育するということを考えるようになった最初であったと思う。自分が実際に教えてみたこともないのに、現場の先生方の指導法がどうのこうのといえる身分ではなかった

けれど、わたしたちは未熟ながらも、自分の目で、体で教育を受けとめた貴重な経験であった。

鳥山小を参観したとき、わたしは一つのことを胸が熱くなるのを感じた。一人の女の先生と、十人余の子どもの授業を見せていただいたときだ。その学級は特殊学級であった。一人一人の子どものそれぞれに、覚えさせようとする先生のひたむきな気持が、見学していたわたしたちにまでも伝わってくるような指導であった。その先生の表情に対して、明るく、全く無邪気に反応している子どもたち。その光景を見ているうちに熱いものがこみあげてしまった。それは、その子どもたちに対しての同情のためのものだったかもしれない。しかし、それ以上に、この先生と子どもたちの強いつながりを肌で感じたためだったような気がする。

参観後、強く心に残ったのは、たんざくのことだった。わたしたちが参観したのは七月だったので、ちょうど、たなばたの時期であった。さを飾ったたんざくの一つに、「ともだちがほしい」というのがあった。このたんざくによってわたしたちは特殊学級というものについて考えたりした。

その後、わたしは、ただあの子どもたちを喜ばしたい

という気持から、学級に何度か手紙を書いた。そして、子どもたち一人一人から返事をもらったときは、飛び上るほどうれしくなってしまう、先生の配慮に感謝したのである。その手紙に、たどたどしい字で、「おねいさん、ともだちになってください。」と書かれていたのがあった。

特殊学級の子どもたちは、大ぜいの仲間の一員になり、だれとでも友だちになりたいのだ。ということを感じはじめ、それからわたしは、この問題を身近に感じるようになっていった。特殊学級に入れるということは、子どもたちにとって良い処置なのかどうか。わたしの小学校時代も、学校には特殊学級が設けてあり、精薄の子どもはここに入るのがあたりまえで、そこに入った子どもは、一般の児童とは隔離された状態になっていた。そしてそれが当然のようになっていたような気がする。鳥山小の子どもたちもそのような目で、あの学級の子を見ているのかもしれない。

過去の経験や、本を読んだりして、特殊学級についてあれから考えるようになった。結論はわからないし、出そうもないけれど、別の角度から教育というものを、見つめ、考えることを与えてくれた一つのことであった。

(第四回研修、昭・四六・七・二一五、青木静子^註)

註、昭・四九・四・三〇の「朝日」がNHKの教育特集、統合教育——ろう教育の新しい動き——をとりあげ、障害児が「普通にとけ込む」ものとして注目し、次のように紹介した。青木さんの経験発表の二年後である。

従来、日本の特殊教育は専門の教育機関をつくって、そこへ障害児を集めて教育を受けさせるといふ「分離主義」をとってきた。この方法は、たしかに行き届いた世話をする面においては都合がよいが、一方、子どもたちの社会性が、小集団にかたよりがちで、例えば、ろう児などの場合、彼ら特有の性格がつくられることが心配されだした。障害のある者だけをひとつとところに集めるのではなく、普通の子どもたちの中へ障害児が統合されて、「広い社会」の中で教育を受けるべきではないか——つまり「統合主義」という新しい考え方が生まれている。

子どものてがみ

——参観・参加のあと学生がうけた——

くに見せんせいへ たかのせいじ

くに見せんせいおげんきですか。ほくはげんきです。あささむいのでかぜひかないようにがんばってください。……ぼくはせんせいのきゆうしよくをもつていくのにきまりました。くに見せんせいがうんどうかいにきてくれてとてもうれしかった。またいつかがっこうにきてください。……ではくに見せんせいさようなら。

坂寄先生へ 四年二組 手塚則子

先生とは今日でおわかれですね。先生はもつと勉強して先生になるんでしょうね。私のしんせきにはいしやさん、小学校の校長先生などいろいろな事をやっている人がいます。先生早く先生になってきて下さい。からだには気をつけて下さい。

おかざき先生へ 九月十七日まゆみより

おかざき先生お元気ですか。わたしもとっても元気ですよ。プールでおよげなかつたのに、いまではもうカードで4きゆうです。休み時間にこうていでおにごっこしたり……ひましたね。おんがくの時間がおわるとピアノカであそびましたね。……みんなの名まえおぼえてくれてありがとう。またらい年もきてくださいね。

わくい先生へ うめずまゆみ

わくい先生おげんきですか、わたしもげんきです。マラソンのいかいは5とうになれました。あきちゃんあつちゃんはでませんでした。だけどわたしは5とうになれてよかったです。それじゃさようなら。

これは五十二年度九月の初め、お願した小学校の教育参加の感謝すべき結果の一つである。一週間お世話になったクラスに、学生らそのあと手紙を出したり、運動会に参上したりしたらしい。秋に、子どもからの画入りの返事三〇あるいは四〇と抱える学生幾人（十人にちかい）かに出会った。それは大切なわけだ、小さい子ら精一杯に若い先生に書いた手紙である。私も見せてもらい、その三、四人のものの中の一つ宛を出したのである。手紙集には「参加」にご指導下さった担任の先生の、手紙への配慮に加え学生へのはげましの言葉まで入れている。われわれも感謝しなければならない。同時に教育参加でえたその学校との親しみ、これがどんなにつよく学生らを動かし教育の世界に引き入れて下さったことか、と思うのである。

（五十二年度教育参加のあと）

次の記録は栃木・烏山・益子・郷里の参観・参加で学生が得た経験の中から、とくに(一)子どもについて、(二)教育内容と自分の学力について、(三)学校、教育について経験したことをとり出した記録の一部である。その外に教育態度・技能に関することも入っている。直接の体験経験を重視してとり上げた。

〇〇〇。は同一人報告 昭和四十九年度稿

〇子どもには家庭の影響が大きい。
〇子どもは学習の面と遊びの面とは大変違う。遊びの中に学習のとき見られない自主性を見た。教師に広く子どもを見る目がある。

〇音楽、清掃などで、言葉だけでなく教師が実践して指導する必要がある。

〇六年生ともなると、教師に対して感情がぶつかってくる。教師をバカにして反発している子も見られた。四年では学級会の会長に協力しようという気持ちはないようだ。自分のことで精一杯という感じだ。発言する子はいつも決まっている。高学年になると先生に劣らないくらいの才能（例えば音楽）を持っている子もいる。上手に伸ばさなければならない。

〇クラスの雰囲気は、一人の中心人物がいるだけで相当

変わるものである。

。四年生を見た。自分を飾らず素直に自分を表現している。まだ、先生に対する心使いは出ていない。

。子どもを呼ぶとき「あなた」と教師が言っていたが、名前では呼ぶべきだ。一人一人を認めるためにも。

。女教師は家庭的なことでも指導すべきだ。

。学校という組織の中で働くのであるから、事務、教師間、父兄との関係など、教師の生活は複雑な組織の中にある。

。学校は教師の気持の一致がきわめて大切である。

(二年一組 小池紀子)

○子どもは決して嘘をつかない。わる賢くない。うらやましい姿である。喜び悲しみなど情緒を時と所をえらばずにあらわす。思うままに感じたままに行動して自分の心をそのままに表現する。

。一、二年は授業中よそ見、下敷いじり、集中力に欠けている。

。四、五年は先生の話に聞き入る。子どもは先生の話は何でも一番のようである。

。先生と生徒の言葉のやりとりの重要さである。それが良く出来てない学級は授業に活発さが無い。先生は子

どもが興味をもち、自分の方に目を集めるよう指導している。

。発表の仕方、先生、友だちのする話し方を、その場で教えている。

。正直な心をもつよう指導していた。例えば悪いことをしたときそれを自分から認めさせ、「悪い子」などとは言わず、正直に答えてよろしい、と良い方に導いていた。

。教師は子どもの知っている範囲を常に頭において、指導していることがわかった。

。世にもまれなくらい輝く目が教師を黙って見つめている。私もその目を見て、初めて「先生」と呼ばれた時、恥かしさと嬉しさと胸のつまる思いがした。私は教師になろう、と心に誓った。この道以外は考えられない。

(二年 失名)

○クラスの雰囲気は先生の性格で変わる。のんびりクラス、きびきびクラス、なごやかクラス、緊張クラスと。教師がすばらしいと子どもは自然について行く。

。黙っていても皆なついて来るような教師になりたい。

(二年 失名)

昭和四四・一二月

「冬休み中の教育参加の記録」

参観、とくに参加する若い人への手紙

冬の休みに郷里にかえり、すぐに小学校にあがって教育の実際を参観させていただき、また助手のように仕事をさせていただきました由報告いただきまして、喜んでおります。

私はあなた方が今後自分の学業を自分で進め、教職への道を自らの力で開き、その世界で将来伸びて行く力のあることを見せてくれたように思います。

教育の仕事に入るためにも、この仕事の指導者となるためにも、教育の実際をできるだけ身につけ、その上に立つて教育もその学問も研究しなければなりません。そのことは初等教育の場合とくにつよく考えておく必要があります。日本の教員養成大学ではそのことを重視する必要があります。今度の参観と参加は、この点について、教員養成のための一つの新しい道を自分の体験で開いて行くものなのです。わたくしはそのように考えています。

真剣に仕事をしている人の仕事を見せて頂き、その仕

事から教をうけるということは、容易にできることではありません。少くとも自分と同じ苦勞をしている人々か、その仕事に何程かの助力のできる力と熱意をもつ人でもない限り、軽々しく自分の仕事を他に見せ、それについて話してくれたひするものではあるまい。私はそう思います。

そうではあるが私は思う。教育という人の世にとつてきわめて大切な仕事に志し、そのために勉強しているあなた方であるから、小さくとも、その重んずべき志を汲み取つて下さる方には、敢えて上のようなことをお願できるのだと思うのです。自分の身心の、ことば通りの未熟を恥ぢながらも、お願できるものと思うのです。

教を受け、指導をうける仕法には、私は禅門の修業僧のそれによるべきものだとも思います。けれどもその仕方を今の私やましてあなた方に求めることはできません。出来ることは、学校の仕事をしておられる先生方の助手のようにして仕事をさせて頂きながら、教育の実際を見聞し経験させて頂くという方式がよいと思うのです。仕事の手助けをしながら教育の勉強をする機会を与えてもらうという方式です。

きびしい現実の仕事には、傍観者の立入る間隙など本

来あろう筈はない。まして教育という国家公共の事業では、なお更のことです。それなのに敢えてそのための機会を与えて頂くというこが、この「参観（観察）」と「参加」であります。

昭和四十五年一月一日夜しるす（昭和四六・研修記録）

註、これは一年の夏休みの最後の一週間の学校参加のあとに、冬休みの初めに母校の小学校にお願いして「参加」をした二十七名の学生があつた。そのうちにその状況報告が七つあつて、私にとつてみな興味深いもの、紙幅つき、その中の四例だけをあげる。

静岡、函南町立丹那小において参加

塩谷 和子

私は冬休みが始まってすぐにお問い合わせにうかがつた訳ではなく、少し身体の調子が悪いために終業式二―三日前に地元の小学校に行った訳でした。

事務的なこともやらせて下さいと校長から言はれたのに、又夏休みの時と同じ先生でしたので夏休みと同じく教育参加的にやらせていただきました。夏休みに三年生

を観察させていただいたので、今回は上級生の五・六年を観察させてもらおうと思つていたが、思い通りにゆかなくてチョット残念でした。

まず校長さんから二日間見て下さいと言うので二日間お願い致しました。

第一日目の十二月十九日は、第一時限社会（三の二）町のゆたかなくらしについて、第二時限算数（三の一）あん算、第三時限おたのしみ会。これは、児童と教師が一緒になつて、歌を歌い、プレゼント交換するということでした。第四時限作文（詩をかく）と言うことではないがなかなか三年生ではまだ詩という事がよくつかめていない児童が多く見うけられました。第五時限は、父兄会のために児童は帰宅。

私は夏休みの時によくお世話をいただいた、三の二組の先生の父兄会に出席させていただきました。父兄会の時、夏休みの参加の時にある一人の問題児とされている子の世話をしあげ、それ以後その児童の素行がたいへん良くなり成績も上つたと父兄会で三の二組の河田先生からその父兄会にお礼は言われるし、又河田先生からも良かったです、と言われて私は、その時はとても嬉しくて、教師としての希望と力がわく想いでした。授業もしない

し別に運動場でも遊んであげないのに、児童がよく先生先生と慕ってくれたことは、初めは力もないのに先生と言はれるとテレる想いでしたが、児童たちの純粋な瞳を見てみると、先生になったつもりでいろいろ聞いてあげたことなど、私はとてもこの事に対して深い喜びを感じます。個人的なことになりますが、夏休みの時は、最後の日に私を尋ねて十名の児童が、先生が大学へ帰るのでお別れに話をしに来たと言って来てくれたことは、うれしいやら何やら複雑な気持でした。

又正月には児童からの楽しい年賀状をもらい、一人だけ問題児の子は、一人で私の家へ来てくれたりして、私は言いようがなくうれしい気持でした。

そして第二日目第一時限音楽(三の二)笛を使い又ハーモニカをも使用して居りました。第二時限交通安全映画(二年)、第三時限体育(三の三)は、外でなわとび、マラソン、とび箱などをやりました。第四時限は全員週末なので外で体力づくりです。種目はなわとびでした。

以上のような日程でやった訳でしたが夏休み、冬休み共に私にとって大きな所を得て、自分としては、まずはよかったと思います。児童がよく私になつて来てくれるので私は本当に嬉しく思いました。

別に特に児童の気持を引こうと試みた訳でもないのに結果に満足し私にファイトを持たせてくれたのは本当に良かったと思う。

なかなか全部は言い尽せませんが、以上が私の教育参加に対する感想です。

長野 恵 世

私は、十二月十六日から三日間だけでしたが、松戸市立中部小学校へ参りました。夏にも一度教育観察・参加をやらせて戴いたので児童達と会うのが楽しみでした。私は夏と同じく一年三組の教室へ行きました。教室に入ると皆なが私を見て、名前を呼んでくれたのでうれしくなりました。

一時間目は「昨日、家へ帰ってからこのことを皆なによくわかる様に話す」ということをやりました。学期末だった為、「皆なにわかるように話をする。また、人の話を落ち着いて聞ける」このことをテストしていました。

二時間目は、社会でしたが国語をやる事になり、明日も国語があり、丁度新しい単元に入ることができるよう

して、私が実習させて戴くことになりました。

十七日は、算数の時間にたし算と引き算を色カードを使ってやっていました。二時間目は国語で、私が実習をしました。まず初めに本を全員で読ませました。「こんな大きい声で読ませていいかしら」と思うぐらい大きな声で読んでいました。どういう場面のことが書いてあるかという事が、この時間の目的であり、それをどの様に導き出せばよいか色々々と質問をして答えさせても、そのものズバリという答がなかなか出ず、本を読んでそれを要約して発表することができず困りました。児童も初めてということでは好奇心があつたのか、割合よく聞いていた様に思いました。発問の答えに発表するとき、なるべく皆なに当たる様に指名しようと思つていましたが、いざやってみると、すぐに手が上る児童をよく指してしまつた様に思います。後で先生に聞いたら、なるべく下の方の児童から指していき、最後によくできる児童を指した方がよい。上位の児童を先に指してしまつたと答がすぐ出てしまうと一言われ反省しました。しかし、見ている時にはわからない児童の反応や、一生懸命になつている様子がよくわかりよかつたと思います。あくる日、先生が私が実習した所を復習して下さいました。それを見ていて

少しガツカリし、大いに反省しました。話し足りなかつた事、板書の工夫、目的を明確にさせるのが少し足りなかつたように思う事等、先生のなさっている授業を見て、「ああ、あの様にすればいいんだ、こうすればよかつた」と勉強になりました。また「自分の言つた様な言い方でよかつたんだな」と思つたり、大いに学ぶところがありません。

十八日には算数の実習をさせて戴きました。「こよみの読み方」で、○日から○日までは何日間あるかをわからせることでした。最初の方は先生が授業されて、後半を私にやらせて下さいました。算数は国語よりやりやすい様に思いました。こよみを指でおさえながら何日間あるか数えさせました。それも今日から○日までとか冬休みは何日間とか身近なことから教えるようにしました。終つて、先生に「そう、あれでいいのよ」と言われ嬉しくなりました。

今回の観察・参加は短い期間でしたが、実習させてい戴き得る事が多く、児童とも以前もり話ができ、成長しており、有意義であつたと思つています。

三 浦 三千子

夏期の教育参加に続き、再び母校である津谷小学校において実習させていただきました。今回は一クラスに固定し援業参観や試験の評価、一般事務など担任の先生の助手的なことをさせていただきました。

授業参観について気がついたこととして、授業そのものが先生と子どもたちの作用反作用であって一問一答形式をとっておられたということ、展開のなめらかさという何というかわかりませんが、そこが特に勉強になりました。毎日、朝の打ち合せに出席後、教室へ行き先生代理として朝のあいさつをしたり、出席をとったりしました。それから、ドリルの答合わせでしたが算数と国語の授業をしました。子どもたちの声が大きくなる。私の方もつい大声になってしまった。今になって反省しています。放課後は清掃の手伝いや教材の原紙をきいたり、その他先生方にお茶をあげたりもしました。一度職員会議にも出席させてくれました。その時は少々荒れぎみでこういう事もあるのかとただ呆然としていただけでし

た。私もよく知りませんが直感として上と下の関係すなわち封建制がどこかに残っているために起きたのではないかと思えました。これも一つの経験であり、勉強であったと思っています。教頭先生も教育の場にはこのようなこともあることを知っただけでもよいと話しておられました。

夏冬二回に渡り教育参加をしましたが、先生の一举一動が直接間接にせよ子ども達に影響するということからも小学校教育はむずかしいものと痛感いたしました。また考え方によってはやりがいのある仕事と言えるでしょう。短期間の貴重な経験を無駄にせず、二年時の実習に何かの糧といたします。

渡 辺 三枝子

学校名・北川辺村立西小学校 校長名・秋間典雄 期間・十日間

今度は学期末にさしかかっていたので、授業も復習的な事が多かったが、私にとっては先生方の御出張が多かった為、空き時間に何でも良いから子供達を頼むと言

わかれて、一時間を私なりに使えたことが、大変勉強になった。前の時（九月初め一週間の参加のこと）は真正正銘参加だけであつたからだ。

私はこの時間に、子供の興味を惹くもとして、本を讀んで聞かせその感想を発表させようと安易に考えた。

幸い子供達に聞いてみたら本は皆が好きであつた。讀み始めは、少し騒がしく私がどの程度の先生なのか品定めでもするようになり私を見つめていた子供達は、やがて讀み進むに連れて真剣な表情になり、私の話に耳を傾け、私語もなくなつてきた。私はこの間少も動揺せずにいられた。それは、一つには、本を讀んで聞かせるのは私の得意とする事であつたからだ。もつとも、子供達は、たとえ讀み手が上手であろうがそうでなからうが、話には耳を傾けるだろう。とにかく、静かになつたクラスをみて、「ああ、いいふんいきだなあ。ピーンと張りつめた勉強の場とは、こんな感じを指すのか」などと氣取つて考えもした。しかし讀み終わると、あの静けさは破られていたのである。感想を発表しているときでも、他の子供は騒いでいて発表する人の意見など聞こうともしない。全く私は裏切られたようながっかりしたような氣持であつた。でもよく考えてみればそれが子供なのだ

思つた。この時間は、子供達をうまく操るのは大へん困難な事だと、身に染みて感じさせられた。特に低学年の場合はそうではないかと思う。又計画のない所には良い結果は期待できないものだとも思つた。

有意義な観察・参加

一年一組 石山 静代

今、小学校の先生にならうとしてがんばっている方へ。なぜ、「小学校の先生」になるんですか。中学校だつて高校だつていいんじゃないですか。これこれこういう理由で、私は、小学校の教師の道を選んだのだという確固としたものを持つていらつしやるんですか。私は、そんな素晴らしいもの何もなかったし、自分の、「先生」という職業に関する適性も全くわからないまま、関心も興味もない毎日の講義に、出席日数稼ぎと試験に落つちちなようにノート作りをするために、出ていたようなものです。

そんな状態で観察・参加させていただいた訳だけれど、三日目の放課後、何とはなしに二、三時間、吉田先生と

お話する時間がもてたのです。吉田先生は、もう25年も小学校の先生をしていらっしやるそうです。先生は今の私の年齢の時には先生になろうなんて思っていないからなかったそうです。デザイナーになることが夢で、東京の方の服装学院で勉強していましたが、親の反対で郷里に帰ってきてブラブラしていた時、たまたま教員の採用試験があつて、何もしないでいる訳にもいかなないから受けていたら受かつちやつて、それがきつかけだそうです。でも、今幸せだとおっしゃっていました。「子どもがいるから、24年間も先生をしてきたんでしょね。子どもの純粹さにひっぱられて今も先生をしているんだなあ。」とおっしゃっていました。

私は、吉田先生とお話しをしてみても、そして、自分の心と体で実際に学校というものの、先生というものの、子どもというものに触れてみて、「なぜ、どうして先生になる。」なんて理論ではない、ことばに表わせない、実感みたいなものによつて、「先生になりたい。」と思つたのです。

私の心を変えさせたのは、やつぱり子どもたちなのでしよう。あの濁りのないキラキラ輝く瞳、あの素直さ、純粹さ、誰をも疑わずに、裸の心で、体あたりでぶつつか

てくる、元気で明るい子どもたち。そんな子どもたちの中にもいろんな子がいるんです。給食ぎらいのジュンコちゃん、いつつも金魚のフンみたいにくつついていたヒロ子ちゃん、ちよつぱり勉強足らないぞ、タツチ、かけつこの得意なひさほくん、はりきりのフミオくん。……一年二組32名。一人一人の顔が違っているようにその性格も違う一人一人が、それぞれにわたしに自己表示してくれるんです。その一人一人に応えてあげたかつたけれど、一週間なんてすぐたつちやつた。最後の、土曜日の学級会るとき、私のためにみんなでお別れ会を開いてくれたんです。みんなで、葉鹿小の校歌をうたつてくれました、ホントにいつしよけんめい。ホントいうとね、私、もう少して涙が出ちゃいそうだったんだ。でもみんなに涙なんか見られたら恥ずかしいからいつしよけんめいこらえたんだぞ！わたしも、吉田先生と同様、子どもたちの魅力にとりつかれてしまったようです。

そしてまた、先生になろうと思うと同時に、教育者というものについて考えさせられました。自分と比較してみると今の私は全ての面において、未熟だ、なんて痛切に感じたのです。教育をほどこすからには、それだけの内容とそれを施す技術とが必要なのだけれど、ピアノ一

つとつてみても、音楽の時間、「石山先生、伴奏お願いします。」なんて先生に言われてドキッ。『大きな栗の木の下で』という曲でしたけれど、伴奏もしどころもどろ。顔がまつ赤になつたりまつ青になつたり、とにかくたいへんだつたのです。だから、教育なら教育するだけの実力みたいなものを、身につけねばと強くなによりも感じました。

それから、先生というのは、強靱な精神力と体力が要求されるのです。そして何よりも大切なのは、人間性なのではないか、と思います。たとえ相手が子どもであっても、子どもであればこそ、人間対人間の触れ合いが大切なのだと思うのです。子どもたちが将来、おとなになつてゆくときの、「人間」、「おとな」、「社会人」、そして「いかに生くべきか」という人生の根本を、教師の中に子どもは、その外郭であるかも知れないけれど、見いだすのではないか。だから、教師というのは、勉強を教える機械ではなく、人生を教える、そういうものなのではないか。

今の私は薄つぺらでわがままで——とても「先生」なんて呼ばれる価値はないんです。だからいつも思います。人間としての厚み、豊かさがほしいって。自分の短所と

か、欠けているところとかを、自分の手で正し、補つてゆく。それは教師になるうえで、そして人間として生きる上で、私に課された義務みたいです。

いままで書いたような事は、やつぱり観察・参加をしたからこそ、感じ考えられたのだと思います。今は入学当時の「私がこの学校へ来たのは間違つていた。みんな自分で選んだ道を確実に歩んでいるのに、私は——。」というようなあせりのようなものはなくなつたし、講義も前のような気持ちでは受けていません。でもやつぱり、不安感というか、「なぜ、先生になるのか、なれるのか。」という疑問がいつも頭をもたげてくるのです。先生になることによつて社会的な規制、結婚のことについて、適性のことについてなどいろいろな問題。いろいろな人の意見を聞いたり、友と語り合つたり、本の中にその解決を求めたり——いろいろとやってみたりしているけれど、悩みは多いのです。でもその悩みの中から、考えることの中から、何かが見つかるような気もします。

これからも私はいろいろと悩み、模索し、そんなこと多いと思うけど、いつでも、教育とは何か、人間とは何か、生きるとはどういうことか——を常に考え、一人の狭い考えの中に固執せず、大きな社会にも目を開き、

自分というものを磨いてゆきたいと思います。そして人間性の一番大切なもの、愛、全てのものへの愛を、子どもをかわいいって感じる心をいつも心のどこかにひそめていきたいと、思うのです。(昭・四九・九)

幼稚園観察・参加について

一年三組 平 子 美智代

教室のすみずみには先生の個性が生かされた飾りつけが無数に施されて、園児達は元氣にとびまわっています。

まず私の仕事は、名前を覚える事から始まりました。初め互いに慣れないで、名前を呼んでもごちなく、呼ばれた方でも、恥ずかしそうにもじもじしていたものです。しかしそんな内にも積極的な園児はすくなつてきました。どうしても先に名まえを覚えるのはそういつた園児たちで、めだたない子は後にされがちです。しかし本当は、目立たない園児こそ早く名前を覚えてあげるべきだと思つたのです。

また肌と肌との触れ合いという一つの愛情表現の大切

さというもの、が身にしみてわかつたような気がします。というのは、頭をなでたり、ほつべにさわるこによつて消極的な子供まで、自然に寄つてきて、気楽に話ができるようになったのです。そして手をにぎると離さないという事も、たびたびありました。

とにかく園児たちは、よくおしゃべりをします。家での事とか、自分の主張など、しかしこうした話を聞いてあげる事が、園児を子供としてではなく一人の人間としてみていく上で、必要ではないかと思つたのです。等々。どれをとつても、今までの私には想像出来ない事ばかりでした。しかし、こうした事が少しでもわかつた事は、とてもうれしい事です。

なかでも一番感じた事は、地域社会という面から、町と田舎という点についてです。この幼稚園はどちらかといえば、田舎の幼稚園に相応しく、環境は緑に囲まれ、車道から離れていて良いのですが、設備はそういう方ではないという事です。こうした中で、町の子と同じような保育というとなかなか大変なものです。このような所に、先生の御苦労が多いのではないかと思ひます。しかし、幼児期に大切な音楽的リズムとか、色彩に対してすばらしく、ハーモニカや太鼓などの演奏には、目を見は

る事もしばしばでした。また礼儀、イスの出し入れと、どれ一つとつても、しつけが行きとどいてるように感じられました。つまり町にせよ田舎にせよ先生、園児、父兄が一体となつて、保育というのに心を傾かせれば、良い教育が出来るのではないかと思つたのです。

まだまだこのような問題は、多くあると思いますが、こういった事にまつたく無知であつた私が、この一週間の観察・参加を通して得たものは、あまりにも多く、数知れません。

どれを見ても、どれを取つてもやりがいのある仕事ではないかと思ひます。これからも、これらの経験を基礎として、積み重ねていく必要があると思ひます。(昭・四九・九)

母校小学校観察の結果

短大二年次夏 柳川和江

子供は遊びが大好きです。そして遊びは子供の要求のようにならる。そして遊びに対する大人の態度の中には、矛盾したものもあるように思われます。

又子供と大人の遊びを考へてみると共通するところと、共通しないところもあります。大人の遊びは複雑で専門的であり、その専門性を生かして、職業としている人がいますが、子供の遊びは大人のそれと比べて単純でより非専門的です。子供の遊びの中には、大人の遊びの一部分にふれてみたり直接参加する場合があります。

これから述べることは、この休み(短大二年次の夏休み)に母校の小学校で子供の遊びを中心に観察したことを参考に遊びについて述べたいと思ひます。

遊びについて、遊びに指導は必要でしょうか。必要ないと思ひます。然し指導の最低限として生命自体の安全について充分注意する必要があると思う。又のびのびと遊べる条件を保証してあげるべきだと思ふ。少々のぎずやよこれに角をたてることは必要ないと思ひます。その考は遊びをさせる時の当然の前提のように思ひます。然し遊びつて何でしょうか。私自身それを問われても明瞭に答へることはできません。ある人の言葉をかりて言うならば、

- 一、遊びは人間的な意味をもつ全人格的な運動である。
- 二、遊びは遊びそのものの中に、子供の精神的、社会的な発展を促す教育的価値がある。

三、遊びには労働からの開放という意味がある。

以上のように述べることができる。遊びは生活に密接な関係をもち、遊びの領域は生活の中で大きな役割を占めている。それに「よく遊びよく学べ」という言葉も、ずいぶん前から使われています。そして私たちはふだん遊ぶという言葉をも、数多く使っています。又これからも多く使うでしょう。万一遊びという言葉がなくなっても遊ぶと思います。多くの時間を占めている遊びは元来自由で素直に自己表現のできるものでなければいけないと思います。

遊びの歴史 省く

遊びの種類

ブランコや「コマ」たこ上げ、かくれんぼ鬼ゴッコ等皆遊んでいるような遊びは世界中どこでもやっているのです。遊びを大きく分けると、ゴッコ遊び、スポーツ的遊び、手の遊びのように分けられる。ゴッコ遊びは幼な児に多く見られる。学校に於ても、ゴッコ遊びは低学年の児童に多いように見られる。ゴッコ遊びはまねゴッコ想像遊びのようである。そしてこの遊びは社会生活に対しての、子供なりの遊びであるように思われる。手遊びは女子に多くみられる遊びであり、静的な遊びである。

雨がふっても室内でできる利点がある。スポーツ的な遊びは、高学年に多く、ルールを守ったりしなければ遊びは行われません。わがままな行動ができず、集団行動をとらなければならぬ。狭い校庭等では、配分もむづかしいようです。現在の遊びを内容からみると、大人のスポーツ型の遊びが圧倒的にふえたようにみられる。ハジキ、あやとり、お手玉、コマまわし等の手技型、輪まわし等の手技型や特殊技功型の遊びが大巾に減っているように思われる。そして栽培飼育型の遊びが減って、市販の部品による組立型の遊びはあまり変化していないようである。遊びを通してみると、大人の遊びが、子供の遊びの原点になっていると強く思いました。

そして遊び仲間が居宅の近隣性によって結びつけられているかという点、そうではないのです。子供を結びつけているのは、学級生活のように思いました。それは帰りがけ等にもうキチンと約束ができてくるようです。これは学級生活で覚えた遊びが、家庭に帰った場合にも、子供を結びつける有力な絆帯となっていることなようです。遊び仲間が通学年的であるのも学校教育では得られる価値があると思います。

これからの遊び

現在は大変目まぐるしい移り変りをしています。遊びもきつと昔から伝えられたものを基礎にして、その上になり立っていることがわかります。そして今後の遊びは古いものの上に更に新しい知識を加えて創造的であるのが望ましいと思います。そしてトランポリンのバネのように、伝統を大切にして更に未来に向って飛躍するのがよいと思う。私はここで創造ということ強調したい。

この創造性を育てるという点に於いては、次のような遊びをすすめたい。それは粘土、折り紙等素朴な遊びです。これは、手の加え方次第でい何様にもなり、非常に勝れたオモチャにもなるからです。そしてそれと同時に手先の器用さや物事を表現する力も養われてゆくからです。創造性を育てるには、やはりオモチャはあまり与えすぎないことです。これはオモチャに遊ばされているからです。最後に子供にとって遊びは人格形成に重要なことで子供の生活の重要な部分であると思う。「遊んでくるよ」といって家から出てゆくのは、実は友と交ってくるのであると思う。遊びを通して子供が子供の社会に参加するということが、それは子供なりの社会的実践であり、これは大人の生活の反映だと思う。遊びは社会的実践としての独自の重みをもっていると思う。

教育実習の意義

いつも小学校・幼稚園のまえを通る。われわれの目ざす教育がその中にある。教育の研究はそれについて行えば一番よいではないか、と思う。

そこで一年の夏の前後、学校参観と参加を教育委員会・学校の特別なご厚意とお許しをえて行っている。その四日と一週間のあいだに見たり参加したりして学習し、経験したことは学生にとって新しくかつ大きく、とくに子どもの可愛いさ純真さ、その子を扱う仕事の尊さに、ふかい感動をうけてかえった。

しかしそれは行われている教育活動のホンの一部、人間の部に属することであるの言うまでもない。つまり、教育を見たりそれに参加したりするといっても、そのことに限界のあるのは当然である。機械の取扱いのように簡単にはわからないのだ。そこで説明がほしいということになる。その必要に応じて出されるのが講義(一・二年の教育・保育・心理・各教科教育法、保育内容)読書の方法なのである。大学はこの方法で教育の事実・理論を研究させ、またしている。これは確かに重要で必須で

どこでも行っている。

ただこの研究は現場をはなれているので、得たものが実際の教育条件（子ども・教師・施設・教育行政・地域の事情）に合っているかどうか確かめる必要がある。しかもそれを各自がしないと確信がもてない、知識が深まらない。その上それは実際の場合で行ない練習して初めて生きた力になる。つまり本当の場でする実践で身につけて力になるふかい学習をする。これが教育実習である。

実習は事実・理論研究から得る以上の、教育がもつ眞実と価値を教えてくれる。歴史の中に生きて現場に働いている教育精神、自明のこととして現場に通用している教育行動、考え、技術、そして何よりも教育の今の問題を生きたまままで示し教えてくれるところ、それは学生にとって実習の場以外きわめて少ない。

ここで、われわれ忘れてならない教育からの二つのことがある。一つは、熱心にすれば実践は、その人に教育の奥まで見せ貴重なことを教え暗示するが、そうでないと与えてくれないということである。指導して下さる先生方にあつてもそのことは同じであろう。求めるものこそ開かれるであろうから。

二つには教育の場は実習生にも先生方にも変わりな

い、責任のある実践の場であることである。実習生の熱意がクラスでもの言わぬ子の心を打って、教室で話しかけるようになったり、いつも欠席していた子が若い実習生に引かれて学校に出るようになった、と最近きいた。反対にまた実習生の注意及ばぬ一寸のすきに、子どもがはしゃいで肋木から落ち骨を折った。受けもつた実習生の心のいたみは大きく、以後実習の悦びも楽しみもなかねで消えてしまった。それは私も今もつて忘れえない。子どもは。実習のたんなる対象ではない、練習材料ではない。働きかける子どもと体に責任を負っているのである。

註、次の実習の中の一経験

さいごにまとめて——実習といわれるように、実際に教えそれで教育のことを学習するのである。実地に教育してその眞実をとらえて確信をえる、その仕事の価値（大切なこと）を体験して志操（心根）を身につける。確信と志操が人の精神の力のもと、それでわれわれは生きていくのである。

教育実習の中の一経験

二年次十月 柳川和江

私の配属された三年三組（栃木市第五小）は明るい素直な良い子たちでした。しかしその中に一人クラスから離れている子がいました。私はその時「どうして口を利かないのだろう、なぜなぜ」ということが心の中に響きわたりました。私はその子どもについて学習面、生活面を追ってみようと思いました（その児童をK君とする）。それが私とK君との出会いでした。

K君は授業のときでも、どこか違うところを見ており、本も開かず一人で下敷に何か書いていました。級友が本を開いてあげるのに無気力のようにでした。私は毎時間K君のそばに行つて指導しました。最初は「アーアー」といつて手で教材を隠してしまいます。その時私はこれからK君との戦が始まると思えました。先生に伺つてみると両親は大変立派な方で、昼間はおじいさん、おばあさんに育てられたそうです。……何とかしてK君に口を利かせたい、と思いました。私は他の授業の時もK君を答

えなくともさして見たり、又授業観察のときは隣に並んで先生の授業を聞きました。最初は反応がありませんでした。私は憂うつになりました。三日たち私が朝教室に入つて行く私の方をじつと見るようになりました。その時、もしかしたらK君に訴えるものがあつたのだろうか、これからもがんばるぞ、と思いました。ある時K君をさしてみると「イヤーン」といつて頭を横にふりました。口を開いた。どうかすると口を利くのでは、と思いました。体育の時間、なわとび、かけ足をしたがK君は満足にはできなかつた。又ボール投げをしようとする、逃げてしまう。そして私の方を見るのです。これは何か話しかけてもらいたいのだと思い、K君が言わなくとも、私一人で話しかけました。又体育の時など手をもち、ボールを受け取つたり、靴のひもを結んでやりました。手とり足とりしてみました。何か反応があればよいと願つてのことでした。そんなある日、K君は習字の宿題を忘れ、おばあさんが持つてきてくれました。担当の先生がK君を呼び「ありがとう」と言いなさい、といつても全く反応がありません。私はあの時「イヤーン」と言つたのだから、何か言えるはずだと思つたのにだまつて見ていました。おばあさんは先生のすすめで、授

業を後から見ることにしました。すると突然K君は、教室中をぐるぐるまわり飛び上り、そのあと泣き出ししました。私は驚いた。反面、口を少し利いたK君がまた口を閉ざしてしまった。又口を……と。あの時「イヤーン」と言った、これからだ、と思っていたのに——と考えるんでしまった。

K君は泣きながら外へ行つてしまった。びつくりした私もK君をさがして外へ出ました。すると水道のそばで泣いていました。そのときK君は何も言いませんでした。が見られるのがいやだったのでしよう。そして私はK君がしゃべらないのに、私の方から一方的に話し又なだめ、教室にもどつて行きました。私はこの時「愛情」このことばで進もう。この語しかない。

毎日毎日根氣くらべになりました。そして常に私の方から話すばかりでした。そして教育実習も中頃、今まで教えた中から一〇題、漢字テストを行ないました。できた人から持つてきてまるを付けて返すのですが、三人目にまるを付けると、K君がすくすくやつてきて「先生まるを付けて下さい」と言いました。私は驚いた。そしてうれしくなりました。「イヤーン」としか言わなかった子が「先生まるをつけて下さい」って言った。私は興奮して

しまいました。担当の先生がびつくりしたようです。いっしょに喜んで下さった。私は「よくやったね、えらかったね」と言つて返すと飛び上つて喜び、自分の席にもどりました。もつと多く口を利いて、これからだ、と思いました。

その日の給食のときK君は牛乳のふたを取るのにあやまつて牛乳の中に手が入つてしまった。すると「こんな牛乳ぼくのめない。イヤダヨ」といいました。言葉はわがままでですが、しかし大変な進歩だと思えました。級友もおどろいた。又音楽の時間も口を開かず歌わない子ですが、二週間目から音程はくるつても、音楽の本を読むようになりました。これでK君にとっては歌つていると同じことです。私はよかつたと思つた。しかし私がいなくなつたらどうなるか、心配しましたが、実習最後の日K君は私に「いい先生になって下さい。いつまでもお元気で」という手紙をくれました。私はうれしくてK君を見たら涙ぐんでしまいました。K君ありがとう……。私の教育実習三週間の努力もむだでなかつたような気がします。

三週間の経験は大変有意義でした。教師次第で子ども

は大きく変わるものと思いました。何事でも興味をもたせることが大切です。漢字の学習も班で競争させると、我を忘れて集中します。子どもの気持を理解し思いやり、一歩も二歩も先に行っていることが大切、子どもの喜怒哀楽を理解した上でないと、教育はできないと思う。常に愛情、そして情熱をもつことです。多数の子どもの教育は大変なことだが、やり甲斐ある仕事。私は口を利かないK君に出合つて、毎日は緊張と真剣のくり返し、よい教育経験でした。

昭和四十三年から五十二年までのあいだ国学院の栃木短大で行った教育観察・参加は、敗戦後、教育大で行ったそれがもとなつている。それがまた西ドイツの教師養成に現在行われていて学校訪問（観察・参加）と日本で訳されている。次に簡単にそれをここに引いて見よう。

西ドイツの教師養成では学校訪問が実習として取扱われている。それは教師養成課程の一環で、学校教育の実際および教職と直結する所での学習といわれるには、学

生が学校とその授業にじかに接触していることで、ノルトライン・ウェストファーレンでは、授業の観察、または授業の準備・実施・評価をふくむ最低週二時間一ゼメスターつづく「授業」である（これは授業のない休暇中にまとめて実施もできる）ことが、この教育実習の条件になつている。

したがつてこの教育実習は大学教師（又はその協力者）と学生と学校教師の三者の協力で行われるが、それには一般に授業（講義）時間に組みこんで行う（いわゆるTagespraktikum）のと、多くは授業のない休暇中にまとめて行う（いわゆるBlockpraktikum）とある。（千葉大椎名教授）

西ベルリンで行っている教師養成によれば、ギムナジウムの教師になろうとする者は、総合大学で五、六年間、二教科の学習と、それに加えた哲学・教育学・心理学を学習する。在学中の実習には二つのやり方がある。一つは全学期を通じて合計六週間の学校訪問（観察と授業）を行う方式、二つには大学の休暇期間に連続して四週間学校訪問する方式である。これまでが「教員養成第一段階」で、グルントシューレ・ハウプトシューレ・レアルシューレの教員を養成する。そのしめくくりとして第一

次国家試験が行われる。

「第二段階のギムナジウムの教員養成」は上の合格者についてさらに三ゼメスターで試補教育を行う。即ち学校実践ゼミナールと現場での実地訓練をうけ、第二次国家試験によって終わる。(国研天野室長)

長谷川教授(筑波大)も現地で西ドイツの教師養成制度について調査された。その話によると、学校訪問する時には、実習について指導する Mentor が学生の世話をしていたと話してくれた。私たちは短大の前にある五つの小学校に学生を連れて行ったが、それはメンートルのすることも引きうけていたことになる。

註、ヘッセン州の学校実習は本誌五号参照。

以上の実習にくらべるとわれわれのは甚だしく貧弱なものであった。第一、行った日数も本来の(伝統的に行われている)実習として短大二年次の秋に行うべき法定の四週間に三週間に減らし、不足の一週間分を大学一年次の夏休の七月の初めを利用したのである。休みを利用したのは私たちの考で西ドイツのそれによったのではな

い。それが小学校の都合によって大学の授業時間に食い込むようになったのは、私の本意とするところではなかった。

そのとき行った教育観察・参加といった小学校訪問は大きな効果をもたらした。そのためこの試みは十年間、私の在職中続行し、その後も引き継がれ改善されて今日に至っているという。然し今にして見れば前述の西ドイツの学校訪問に比較すれば、貧弱きわまるものである。

西ドイツのそれは前述のように、正式に教育実習として養成課程に組み込まれて、授業のない休暇のときは連続四週間行われ、メンートルがその指導管理について行くという。

ところがわれわれが手を抜いていた所を、学生の方が積極的にこの方法を利用して大きく効果を発揮し、それを身につけ、逆にいま私を反省させているのである。もっとも私も一年生の夏休の前後の時間を利用した観察・参加だけでなく、続く冬休みに、早く郷里の母校(小学)に参上、近況を報告するとともに、教育観察・参加、とくに参加をお願いせよ、正月前のアルバイトなどは止めよ、などとすすめた。その効果は大きく、一部は前に出してある。

しかし学生を拘束すぎる恐れもあるか、と考え、一、二年でその後は自由にした。

ところが学生のうち熱心な人は、例えば長野県から入学した安川（柳沢）純子さん（栃木五期卒）も、二年生の春と夏の休暇を、独自に母校の小学校で教育参加したときの熱意と実力が認められてか、卒業と同時に長野・下伊那・下条の小学校に奉職した。そこで家庭通信というガリ版刷りをつくって子どもに持たせてやるということで、私にも送ってくれた。その家庭通信なるものをフルに利用、後に学級経営に成功、埼玉県から表彰された柳川（吉山）和江さん（栃木八期卒）も、二年生の夏郷里の行田市の母校（小学）に上って教育参加・観察し「子どもの遊び」を記録にまとめた。それを認めて下さった小学校はそれをPTAの新聞に出して下さった（前出）。もっとも私らの学校訪問を二年次の春、夏の休暇まで拡張して行うべきだった、よい結果が多くえられたであろうのに、と今にして惜まれる。

柳川さんは、あの遊び研究の結果を、卒業後すぐ奉職した行田市荒木小学校四年二組の子どもに使った。学級経営「遊びを通じた集団づくり」が研究主題であった。

つまり西ドイツでの教育養成の行き方、講義する理論

と学校訪問（教育観察・参加）とを二本立にした教員養成の仕方を、私はもつと徹底して考え且つ行うべきであった。この行き方を早くから計画していたのは、エッグースドルファーであった。師の逝去に先立つ八年前に *Paed. Hochschule als Sätte d. künftigen Lehrerbildung. 1950*（将来の教師養成の場としての教育大学）を出している。この中では、教育諸科学、教育史、宗教、哲学、教授学、心理学、教育社会学等の理論の講義と、教育観察・参加（*Hospitation*）から始めて多くの型の実地授業との二つを、第一ゼメスターから第六ゼメスターまで通して、常に二本建に排列し計画している。

「現在西ドイツの基礎学校・基幹学校・実科学学校の教師が主として六ゼメスターの教育大学で養成され、一部のみ総合大学で養成され……基幹学校の教師を総合大学で養成することに、くり返し疑問が出されている」（ヘルマン・レールス、日本での講演・天野正治訳）といわれている。反省せざるを得ない。

次にエッグースドルファーの教員養成について概観して、私の報告を終えようと思う。

三年制教師養成大学の教育計画

- | | |
|---|---|
| <p>1 冬学期、十八週、計七十二時間 4std. protag II
72std.</p> <p>1、教育的人間学と発達論（子どもとその発達）4. std.
2、青少年教育、その本質、可能性と限界、その目的（一般教育学第一部）4. std</p> <p>3、西洋の精神史、第一部古代から初期啓蒙主義までの教育重視の哲学体系と教育学体系に導く精神思想 4. std</p> <p>4、哲学と宗教の観点からの現代人間像 2. std.</p> <p>5、グルントシュューレ教科目の方法論とその教材領域への導入 四時間</p> <p>(a) 一年生と二年生への合科教授
(b) 三年生と四年生の郷土科
(c) 上級の地理科</p> <p>6、学校の実地練習 Hospitation, Lehrbeispiel, Lehrversuche Lehrproben (学校観察・参加、示範授業、試</p> | <p>み授業、試補授業) 五時間</p> <p>7、ゼミナール実習とそのグループ討議 三時間</p> <p>8、多様な工作実習 二時間</p> <p>9、音楽教授と保育音楽 (Musikpflege) 三時間</p> <p>10、できるだけだけの選択科目 実地授業 一七時間</p> <p>1 夏学期一四週一日四時間、計五六時間</p> <p>1、青少年教育と青少年指導の仕方（一般教育学・第二部） 四時間</p> <p>2、実験心理学と教育学への導入と基礎研究 二時間</p> <p>3、治療教育学と特殊学校実践の綱要 二時間</p> <p>4、現代の哲学思潮とそれが青少年・国民教育者に対してもつ意義 四時間</p> <p>5、宗教教授、その教材と方法 二時間</p> <p>6、グルントシュューレと上級教科の特殊方法及び教材領域への導入 理論的講義 一四時間
四時間</p> <p>(a) 線画と芸能教授
(b) 工作教授と手作業
(c) 体操と身体教育</p> <p>7、学校の実地練習 (Schulpraktische Übungen)</p> |
|---|---|

	8、ゼミナール実習とそのグループ討議	五時間			
	9、多様な工作実習	二時間			
	10、音楽教授と保育音楽	三時間			
	11、できるだけだけの選択科目		実地授業	一七時間	
	2 冬学期 II 3・ゼメスター				
	1、教育のための心理要論(子どもの心意とその陶冶性)	四時間			
	2、青少年陶冶その本質と機能と課題、それを支配する原理(一般教授学)	四時間			
	3、啓蒙主義の初めから現代までの教育と教育学の歴史(宗教と哲学との時代思潮の概観)	四時間			
	4、宗教的世界観とそれが人間と人間社会の形成についてもつ意義	二時間			
	5、グルントシュューレの教科目の方法と教材領域への導入	四時間	純理論	一四時間	
	(a) ドイツ語教授の全部門				
	(b) 歴史教授				
6、	学校の実地練習、学校観察と参加、示範授業、授業				
	7、ゼミナール実習、教育古典の講読とそのグループ討議	五時間			の試み、試補授業
	8、多様な工作実習	三時間			
	9、音楽教授と保育音楽	二時間			
	10、できるだけだけの科目選択		実地授業	一七時間	
	2 夏学期 II 4・ゼメスター				
	1、青少年陶冶、教授の仕方と教授形式(一般教授学第二部)	四時間			
	2、構造心理学と性格学(子どもと人間類型)	二時間			
	3、青少年法と学校法	二時間			
	4、郷土の社会科と田園風の慣習と作業生活の解明	四時間			
	5、資料と方法からの宗教教授	二時間			
	6、グルントシュューレと上級教科の特殊方法と、教材領域への導入	四時間	理論的講義	一四時間	
	(a) 歌唱と音楽教授				
	(b) 上位の学校の外国教授				
7、	学校の実地練習	五時間			

8、ゼミナール実習とそのグループ討議	三時間	7、ゼミナール実習、講読そのグループ討議	三時間
9、多様な工作実習	二時間	8、多様な工作練習	二時間
10、音楽教授と保育音楽	三時間	9、音楽教授と保育音楽	三時間
	実地授業 一七時間		実地授業 一七時間
11、できるだけだけの選択科目		10、出来るだけの選択科目	
3 冬学期 II 5・ゼメスター		3 夏学期 II 6・ゼメスター	
1、子どもの精神の発達（発達心理学とくに学校期の）	四時間	1、教育社会学（共同体の内と共同体による教育と陶冶）	四時間
2、教育制度と陶冶制度との組織、養護・教育・陶冶の編成、個々の学校形式の課題	四時間	2、理想と現実の教師の姿（形態）	二時間
3、国内、外国における現代教育の潮流（教育の文献学による）	四時間	3、学校学（Shul Kunde）と学校衛生	二時間
4、宗教の教材（バイブル、ドグマ、歴史的原拠にもとづく）	二時間	4 _a 、田園の学校とその特色	二時間
	純理論 一四時間	4 _b 、田園の職業学校の教材範囲とその教育方法	二時間
5、グルントシュレの教科と上級教科の方法論、それと教材領域への導入	四時間	5、教材の教授方法から見た宗教教授	二時間
(a) 算数と幾何学		6、グルントシュレと上級教科の特殊方法論	四時間
(b) 物理・化学と理科（小中学の）		(a) 社会科学	
6、学校の実地練習（学校観察・参加、模範授業、授業の試み、試補授業）	五時間	(b) 複式・単級学校の教授学	
		(c) 授業案と教材計画の修得（研究・修得）	
		7、学校の実地練習（田園の学校実習）	五時間
		8、ゼミナール実習とそのグループ討議	三時間
		9、多様な工作実習	二時間

10、音楽教授と音楽保育

三時間

実地授業 一七時間

11、出来るだけの選択科目

学校の実地練習

教員養成時の中心は練習学校 (Übungsschule) であつた。そのことは教育大学においても変ることはあり得ない。理論の形で将来の教師のところにもち込まれるものが、ここでは直ちかに見る現実であり、模範であり、心がげます実験、成功した行動そのものである。

学校の実地練習は、大学となつた教員養成でも少しも減らされることはない。かえつてそれは強化される。というのは、この教育大学で実習するものは、前の練習学校の時より年長ちけ成熟しているから。又養成期間も延長され六ゼメスターとなり、その学年はすべて職業陶冶で、高校生らについている、あのやつかいな重荷はもうないのだから。ただ次のような欠陥は極力さげなければならぬ。即ち余りにも小さすぎる練習学校体制に、多すぎる教師志望学生数を見込んでおく困つた事情だけはさげなければならぬ。

見積りでは次の案ができる。即ち男子八学級女子八学級をもち自由に使え、できるだけ完成した学校体系で、そのさい普通の学校区が扱う学校であること。養成期間の練習学校には例外事項が存すべきでない。ただ次の場合は実際上の理由から他のクラスと区別しなければならぬ。即ち生徒数三〇をこえないこと。それは大学では独自の広い練習学校ハウスを建設できない、という条件がある。そうしなければ大学生が普通の授業に参加する余地がない。特別の公開授業にはそれを祝祭ホールまたは教育実習ホールに移して行ふ。

もう一つ絶対的前提となつてゐるのは、どの大学にも定教條項が定められていることである。一学年に一五〇名以上の学生を入学させることは排除されねばならぬ。それで、六ゼメスターの研究を大学で完全に行えば、四五〇名が同時に並列して研究できることになる。

この数はさらに学生と大学の都市との個人的接触を許すことになり、その結果さらに練習の配分もできるようになる。このことが学生の各々に模範授業の十分な数と、試み授業と試補授業を保証することになる。

それとともに学校の実践とする試験がとり去られてはならない。ごく特別な「思い付き」からいわゆる予備教

育実習 (Vorpraktikum) が提案されている。教職の候補者は教週間学校訪問をするのであるが、そのとき、学校の教職員と管理者の間で、学校と教育的働きとの一般的有能さが評価される、とく別な教授上の業績をあげることなくても、証価される。

その上、教師候補者は大学の養成教育のあいだに、大学の町の他の学校の課業について識見をうけ取る。そしてその所の事情の下でも、できるだけその授業指導に引いて行かれるようにする。教師候補者は何よりまず特殊学校のクラスで一通り短時間実習する。そして特別の施設の凡て、例えばスライド・フィルム研究所、学校博物館等に親しむ。他方、次のような重要な教育施設を紹介する機会を与える講義をする。即ち乳児院、幼稚園、託児所と孤児院、職業学校、中等学校等についてである。そのとき重要なのは、一週間以上の田園学校実習の時機で、できるだけ終末試験の前におく。

医師が国家試験に合格して、なお診察と処方に指導を要するとされ、補習教育が義務にされた採用試験までの二、三年間、医師の実習生は集中実習を要するとされているのと同様である。

教育大学での時間の半は、実地練習 (実習) と、それ

への導入に属するということにならざるをえない。

私はこの観察参加を国学院の栃木短大一年の夏休みに実施した。その有効なことを公表したいので、急いで以上に述べた。

女子の短大であつたことは、私の実験に好都合であつた。教師の第一の必要条件と人の認める、子ども愛を、彼女らが出した入学志望の第一理由にしていたからではないか。「学部内の教官世代交替がはげしい。自己の学問の価値を教師養成と無関係とすることで保持しようとする若い教官の増加は、今後の教員養成の大きな不安材料と思う」(本誌第五集菊地龍三郎あとがき) とあるから。西ドイツの学校訪問 (Schulbesuch) といわれたこの制度は、彼の国に伝統的な不動のものとなつていっているように思われる。

ハウプトシューレの教師養成を行う三年制の教育大学でも、ギムナジウムのそれをしていける四年の総合大学でも、第一段の養成段階で、六週間とか四週間の学校訪問を、教師養成課程の一環として、他の教科と並行に行つているのである。

ところが日本では、この学校訪問で得る経験の教育実

習が行われていない。そのため学生は大学の講義を理解し、教育経験を分析し総合して本質をとらえる研究分法も身につけずに、最終学年の教育実習に入ってしまうのではなかったか。

「小学校教員養成の教育課程の改善について」の報告（昭・五六・六）がある。

教育大学・学部の一についての詳細な調査である。

それによると、教職専門科目の開始（講義の開始）は一年前期が二四大学、二年前期が二三大学である。その講義を聴講するには、それに先立ち、又は並行して、学生は教育を直接に経験していなければならない。ところが、上の調査によれば観察・参加を教育実習と区別しないで、同一機能のものとしている所が三五大学（七三％）、区別している少数の大学のうち、二年に観察・参加を課しているのは、一大学だけである。

つまり大きく見れば、観察・参加はいわゆる教育実習と同じ機能のものにとらえられている。